

【第25回大会】

シティズンシップ教育の枠組みと実践

—— 企画趣旨 ——

清田 夏代

(実践女子大学)

英国において、現代社会における民主主義の危機に対応することを目的とするシティズンシップ教育が導入されたのは、2000年のことであった。それから十余年を経た2011年、デヴィッド・キャメロン首相は、英国の多文化主義政策は失敗したという公的な見解を表明した。移民・難民の増加、若者の政治への無関心、規範意識の低下などの問題が、こうした危機の構成要素であるとみなされた。それからさらに約5年が経過した現在、イスラム圏の政治情勢はますます不安定化し、難民・移民をめぐるヨーロッパ諸国の葛藤は、いっそう深まっている。英国社会もまた、こうした人々を多く受け入れている国の一つとして、その様々な影響から免れてはおらず、ついにはEU離脱の是非を問う国民投票を行うまでに至った。これらのことは、15年にわたる英国のシティズンシップ教育が効果のないものであったということの意味するものであろうか。

多元化する現代の国民国家は、いずれも社会分裂の契機を常に抱えている。社会の中の文化、宗教、世代、嗜好などの多様化が、そのまま深刻な社会の分断に結びつきかねないのである。国民国家の体制でかつて通用した統合原理が、もはや通用しなくなっているのだ。シティズンシップ教育は、そのような時代の新たな統合原理に結びつくものとして、その存在意義と方法を真の意味で問われている。そして英国では、果敢にシティズンシップ教育の取り組みと見直しが続けられてきた。

本シンポジウムは、そうした英国のシティズンシップ教育の取り組みを概括したうえで、マシューズ氏と日本側パネリストの蓮見二郎氏、片山勝茂会員との議論、また、当日の参加者との質疑を通じて、その可能性と課題を明らかにし、最終的に今後の日本の学校教育における取り組みへの示唆を得ることを目的とする。